

2026 年 9 月 2 日

NEWS RELEASE

「沖縄闘牛の経済効果

—闘牛愛が紡ぐ伝統文化、次代への継承に向けた課題—

株式会社おきぎん経済研究所は、「沖縄闘牛の経済効果 —闘牛愛が紡ぐ伝統文化、次代への継承に向けた課題—」を発表いたします。詳細は本文をご覧ください。

要旨

- 沖縄闘牛は、古くから大衆娯楽として楽しまれてきたものである。春の全島大会は毎年、超満員の開催となっており、地域に根付いた文化として多くの闘牛ファンを魅了し続けている。
- 近年は、さらなる盛り上がりを見せており、地元根付き地域文化を体感できるイベントとしての性格も強めている。SNS を含めたメディア露出も増え、家族連れや女性客、外国人客などファン層の広がりもみせており、地域の催しと組み合わせた企画のほか、県外との交流や観光資源としての活用など、様々な取組の展開から地域資源としての価値を多方面に広げている。
- 本レポートでは、闘牛大会を視点にその経済効果を試算した。2025 年 8 月から 2026 年 7 月までの 1 年間に開催された闘牛大会 26 件を対象とし、その開催に伴って発生した支出を整理した。
- 闘牛大会への来場者を 30,150 人と設定し、その来場者消費、および大会運営費から直接的な支出額を約 9,880 万円、その支出額より波及効果を含めた経済効果を 1 億 3,489 万円と試算した。
- 地域の魅力を高めるコンテンツであるとともに、地域に一定の経済効果をもたらしていることを示した一方で、次代への継承や持続可能性という視点では、牛主の高齢化や担い手不足、飼育コストの高騰などが課題として挙げられる。
- 一般的な肉用牛の一头当たり年間飼料費は 2020 年比で 1.4 倍に高騰している。あくまで参考値だが、沖縄の闘牛数に当てはめれば飼料費だけで年間約 2 億円にのぼる。
- 闘牛飼育は多くのコストや手間暇がかかる。牛主をはじめとする関係者の闘牛愛が、今日までの闘牛文化を支えてきたといえるが、近年の飼育費の高騰はその負担を大きく増すものである。
- 今後の沖縄闘牛の発展には、より積極的な地域の関わりが重要である。魅力ある地域資源・文化資源として、県民や地域の企業、関係機関などの関心がさらに高まっていくことによって、次代への継承、そしてかつてのように県内全土で闘牛文化が発展していくことに期待したい。

(お問合せ先)

株式会社おきぎん経済研究所（担当: 研究員 與那覇徹也）沖縄県那覇市牧志 1-3-45 牧志ビル 3 階
TEL: 098-869-8711 HP: <https://www.okigin-ei.co.jp/>

本資料は、当社が信頼できると判断した各種データに基づき作成しておりますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。また、本資料に掲載された情報の使用による結果について、当社が責任を負うものではありません。無断での複製・転載・転送等とはご遠慮ください。

REPORT

「沖縄闘牛の経済効果

—闘牛愛が紡ぐ伝統文化、次代への継承に向けた課題—

～目次～

1. はじめに	1
2. 沖縄闘牛と地域の関わり	2
3. 沖縄闘牛の経済効果分析.....	6
4. 次代への継承・発展に向けて	10

本レポートは、一般社団法人沖縄県闘牛組合連合会をはじめ、多くの関係者の皆様のご協力を得て作成しました。調査にご協力いただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

1. はじめに

沖縄における闘牛(ウシオーラセー)は、その起源は明らかではないが、少なくとも 1911 年には開催された大会の記録が残されており、古くから大衆娯楽として楽しまれてきたものである。牛同士を戦わせ勝ち負けを競う闘牛は 1962 年に第 1 回の全島大会が開かれ、当時は 1 万人以上の観客が集まったとも言われている。2013 年には第 100 回を迎え、2026 年の第 124 回春の全島大会においても、会場であるうるま市石川多目的ドームは超満員の開催となっており、沖縄闘牛が地域に根付いた文化として、多くの闘牛ファンを魅了し続けている。

闘牛の文化的発展は沖縄だけでなく全国でみられ、全国闘牛サミット協議会は岩手県久慈市、新潟県長岡市、小千谷市、島根県隠岐の島町、愛媛県宇和島市、鹿児島県徳之島町、天城町、伊仙町、沖縄県うるま市の 6 県 9 市町と闘牛関係団体によって構成されている。うるま市では、闘牛が 2018 年に市無形民俗文化財に指定されたほか、「新潟県の牛の角突き」は国の重要無形民俗文化財に指定されているなど、文化財としての保護、発展が図られており、全国闘牛サミットでは毎年持ち回りで各地で闘牛大会が行われるなど、県外との文化交流も行われている。

一方で、沖縄闘牛を取り巻く環境は近年、変化がみられる。沖縄闘牛がメディアに取り上げられる機会が増えるなか、闘牛を題材とした特撮番組や映画、#闘牛女子といったコンテンツが認知度を高め、大会時には実況解説を交えた取組を行うなど、闘牛のエンターテインメント化が評価を得ている。また、大会の際には、民謡ライブや抽選会、地域の祭りやイベントと合わせて行われる場合もあるほか、観光闘牛と題して、エキシビジョンマッチの観戦や牛とのふれあいが体験できる観光プランも提供されており、地域資源、観光資源として沖縄闘牛が寄与していることがうかがえる。

近年さらなる盛り上がりを見せる沖縄闘牛だが、文化としての維持継承には根深い課題が挙げられる。かつて県内各地で行われていた闘牛大会は、現在限られた地域でしか行われておらず、闘牛という言葉の認知度は高くとも、観覧したことのある県民は多くない。牛主については、高齢化と担い手不足が深刻であり、物価高による飼育コストの高騰は後継者不足に拍車をかけると懸念される。

本レポートでは、沖縄闘牛の現在地を経済的視点から整理するとともに、沖縄闘牛の地域資源としての価値を可視化し、持続可能な伝統文化としての継承・発展について考察する。



※出所:(一社)沖縄県闘牛組合連合会提供

2. 沖縄闘牛と地域の関わり

(1) 闘牛大会の開催状況

沖縄の闘牛は、有名なスペインの闘牛とは異なり人と牛が闘うスタイルではなく、相撲のように牛と牛が互いの角を付き合わせて押し合うように闘うものである。起源は諸説あるが、もともと農耕に使われる牛の力比べとして始まった農村の娯楽であったという。

現在の闘牛大会は、相撲のように番付表(対戦組み合わせ)が編成され、多くは10試合(20頭)前後の戦いが楽しめる(図表1参照)。1トン前後の牛同士が角を突き合わせ、相手が戦意を失った時点で勝敗が決まるという迫力あるものであり、大会では、闘牛士(勢子)が牛のそばで掛け声をかけながら鼓舞し、実況解説によって技や展開が説明されるため、初めて観戦する人でも試合の見どころを理解しやすいものになっている。

近年は、民謡ライブやエイサー、抽選会など、地域の催しと組み合わせた企画もみられ、単なる試合の場にとどまらず、地元根付き地域文化を体感できるイベントとしての性格も強めている。会場となる闘牛場には往年の闘牛ファンだけでなく、家族連れや女性客、外国人客もみられるようになってきているほか、筆者が観覧した闘牛大会では、地元の少年野球チームが会場内で募金活動や清掃活動を行うなどの取組がみられた。闘牛が好きなおじさん達が集まる閉鎖的なイベントとしてのイメージも少なからずあった闘牛大会だが、近年は地域に開かれた取組として広がりをみせている。

図表1 大会番付表

沖縄県知事杯・うるま市長杯・琉球新報社杯争奪戦 第124回 春の全島闘牛大会 ① 令和8年 5月10日(日)午後1時 ② 石川多目的ドーム		
(A)	(番付)	(B)
ファイティンガカ 斗牛士名順(1000kg) 沖縄本島産 黒 輝 直隼武雄(宜野湾) 940kg 沖縄本島産 長賢畜産政心大カ 鶴辺(鹿屋) 840kg 沖縄本島産 大 砲 久遠司(具志川) 1100kg 岩手産 拳勝號 長山敏行(比嘉) 950kg 沖縄本島産 戦闘閻覇 戦闘グループ(宜野湾) 940kg 徳之島産 樹(マチー大城) 龍 大城しゅんと(具志川) 870kg 徳之島産 相模富士嵐 仲村盛樹・幸地良正(具志川) 830kg 徳之島産 キラキラ☆にゃん太 安藤名貴(具志川) 830kg 沖縄本島産 興波マルゲン 伊波親太郎(読谷) 770kg 徳之島産 琉〜Ryuto〜翔 上地翔(八重山) 680kg 八重山産	全島一優勝旗争奪戦 5' 50 中量級優勝旗争奪戦 13' 31 軽量級優勝旗争奪戦 7' 06 4 取 消 5 17' 29 6 18' 10 7 30' 53 8 1' 39 9 14' 29 10 3' 34 封切戦 40' 34	メガイーグル イーグル会(読谷) 1080kg 徳之島産 心美花形 仲野四郎(読谷) 950kg 沖縄本島産 伊良皆庄送覇琉玖 松合(読谷) 840kg 徳之島産 山幸パンダ 山口栄秀(読谷) 1050kg 沖縄本島産 常勝会TORA 常勝会(具志川) 900kg 沖縄本島産 73ゆかり號 獣王會・平成17.18年生徒士(南那) 950kg 徳之島産 幹三郎 城間誠也(読谷) 900kg 沖縄本島産 MAX剛力 上江洲安一(具志川) 830kg 徳之島産 南星翔柁王 南星グループ(読谷) 800kg 八重山産 33角金 伊波親太郎(伊波) 830kg 徳之島産 勝連強靱 読谷・南大(与那) 730kg 沖縄本島産
主催：(一社)沖縄県闘牛組合連合会 共催：琉球新報社 後援：沖縄タイムス社 協賛：琉球放送、琉球朝日放送、琉球朝日放送、琉球朝日放送、琉球朝日放送		

※出所：(一社)沖縄県闘牛組合連合会提供

▼満席のうるま市石川多目的ドーム



※出所：(一社)沖縄県闘牛組合連合会提供

▼大型スクリーンと実況解説席



※著者撮影

▼闘牛場でのエイサー演舞



※出所：(一社)沖縄県闘牛組合連合会提供

▼勝牛に子供が乗る定番のパフォーマンス



※著者撮影

▼券売所



※著者撮影

▼地元少年野球チームとの関わり



※著者撮影

※著者撮影写真は、個人情報保護の観点から一部ぼかし加工を施している(以下、同じ)。

開催数をみると、年間 20 以上の大会が開催されており、2025 年は 25 回の大会が行われた(図表 2 参照)。大会はうるま市石川多目的ドームでの開催が中心であるが、各地の闘牛組合が主催することが多く、今帰仁村や本部町などでの実施もみられる。正月三が日の開催は恒例化しており、春や秋には毎週のように大会が行われる。夏は牛にとっても厳しい試合環境となるため開催数は少ないが、近年は夕方からのナイター開催なども行われている。春と夏、秋には全島大会が行われ、全島一(沖縄チャンピオン)が決まる本大会には多くの観覧客が訪れており、春の大会については、例年 3,000 人超の観覧客がみられる一大イベントとなっている(後述するが、2026 年より夏の全島大会は中止)。

図表 2 2025 年に開催された大会一覧

	大会名	日程	開催場所
1	お正月だよ!!新春北部大闘牛大会	1月1日	今帰仁村闘牛場
2	新春華牛大闘牛大会	1月2日	うるま市石川多目的ドーム
3	新春南部大闘牛大会	1月3日	"
4	旧正月大闘牛大会	2月2日	"
5	屋慶名大闘牛大会	2月9日	"
6	東恩納若牛育成闘牛大会	2月16日	"
7	★～第2回S,四八丑虎會～★ 軽量級優勝旗争奪戦四八會選抜	2月23日	"
8	3月古堅闘牛ダービー	3月9日	"
9	重量級スペシャル大闘牛大会	3月16日	"
10	第16回平成若猪会大闘牛大会	3月23日	"
11	具志川・胡屋闘牛大会	4月13日	"
12	G★W与勝闘牛大会	5月4日	"
13	第122回春の全島闘牛大会	5月11日	"
14	東恩納闘牛大会	6月8日	"
15	父の日大闘牛大会	6月15日	"
16	第17回平成若猪会大闘牛大会	6月22日	"
17	ドリームマッチ大闘牛大会	6月29日	"
18	第13回夏の全島闘牛大会	8月10日	"
19	有望牛大闘牛大会	9月21日	"
20	秋季あげな大闘牛大会	9月28日	"
21	第23回もとぶ観光文化フェスタ闘牛大会	10月11日	本部多目的広場闘牛場
22	第28回読谷まつり闘牛大会	10月19日	うるま市石川多目的ドーム
23	第28回全国闘牛サミット記念大会	11月2日	"
24	第123回秋の全島闘牛大会	11月9日	"
25	2025沖縄闘牛千秋楽与勝闘牛大会	12月21日	"

※出所:(一社)沖縄県闘牛組合連合会資料より作成

※注:離島での大会など、ここに含まれていない大会も一部あり

図表 3 闘牛組合

一般社団法人沖縄県闘牛組合連合会 ＜支部組合＞		
1 北部闘牛組合	8 具志川闘牛組合	15 島尻闘牛組合
2 本部闘牛組合	9 あげな闘牛組合	16 南部闘牛組合
3 屋慶名闘牛組合	10 読谷闘牛組合	17 与那国闘牛組合
4 与勝闘牛組合	11 古堅闘牛組合	18 八重山闘牛組合
5 石川闘牛組合	12 胡屋闘牛組合	19 新石垣闘牛組合
6 伊波闘牛組合	13 勢頭闘牛組合	
7 東恩納闘牛組合	14 宜野湾闘牛組合	

※出所:(一社)沖縄県闘牛組合連合会資料より作成

(2) 沖縄闘牛の各方面への広がり

近年の闘牛大会では、実況解説や音響、入場演出、オープニングアクトなどの工夫により、初めて観戦する人でも試合の見どころや盛り上がりを共有しやすい形へと変化している。このようなエンターテインメント性の高まりは、家族連れや女性客など、ファン層の広がりにも寄与している。また、闘牛を題材にした特撮番組や写真集、さらには牛主らによる SNS での活発な情報発信などもみられ、このような取組は沖縄闘牛の認知度と魅力を着実に高めている。

また、近年の沖縄闘牛については、観光資源としての側面も強めている。「闘牛のまち」と名乗り、沖縄闘牛の中心地となっているうるま市では、地元ツーリストが観光闘牛と題して、観光客向けにサービスを提供している。エキシビジョンマッチの観戦、闘牛レクチャー、牛との記念撮影、牛舎での世話体験などを組み合わせた観光闘牛の取組が行われており、迫力ある地元文化の体験型コンテンツとしての可能性を高めている。

さらに、全国闘牛サミットを通じた県外の闘牛文化との交流も、沖縄闘牛の価値を考えるうえで重要である。闘牛文化は沖縄だけでなく、全国各地でみられ、全国闘牛サミットでは、各地域の闘牛関係者が一堂に会し、保存・継承の取組や課題を共有している。特に、鹿児島県徳之島町は沖縄と関わりが深い地域となっており、闘牛の売買や試合など闘牛文化を通じた地域のつながりができている。このような県外とのつながりは文化交流として新たな展開を生み出す可能性がある。

▼観光闘牛チラシ

市指定無形民俗文化財
沖縄観光闘牛

【2026年開催日】
4/25・5/16・6/20
7/18・8/11・9/21

闘牛実況アナウンサー
伊波 大志

10:00 オープニングアクト
うるま市立美術館のアーティストによる闘牛ライブ

10:15 闘牛レクチャー
闘牛の歴史や闘牛場の見どころをわかりやすく解説

10:25 闘牛エキシビジョンマッチ2試合
地方自治体の闘牛を視察で体験！
各試合の前半は観戦を目的としたエキシビジョンマッチ！
後半は実況アナウンサーによる解説と闘牛の歴史を学ぶことができます

11:00 闘牛と写真撮影
闘牛と写真撮影は観戦の醍醐味！闘牛と写真撮影の思い出を撮影

※抽選で当たる！
お楽しみ抽選会あり！

※会場限定！
観光闘牛オリジナルグッズ
発売中！

※当日受付のみ（事前予約不要）
※15歳以上の観戦者・観客バスでの観戦は事前に予約が必要です。
料金 大人（中学生以上）2,000円 / 小人（小学生以上）1,000円
※小学生未満は無料
時間 9:00～受付 / 9:30～闘牛（途中の入退場も可）
会場 石川多目的ドーム（闘牛場）〒904-1106 沖縄県うるま市石川2298-1
※沖縄県観光産業特区より車で約10分。闘牛場まで徒歩約10分。
※観戦者専用バスが闘牛場まで送迎します。無料シャトルバスも運行。

主催 レキオツーリスト TEL: 098-973-2002

※出所: 有限会社レキオツーリスト WEB サイト

▼全国闘牛サミット



※出所: 株式会社奄美新聞社 WEB サイト

▼うるま市観光産業特区アンバサダーの認定



※出所: (一社) 沖縄県闘牛組合連合会提供

3. 沖縄闘牛の経済効果分析

(1) 闘牛大会の経済効果に係る 3 つの視点

沖縄闘牛は、その魅力から地域資源としての価値を多方面に広げている。本節では、その一端として、年間を通じて行われる闘牛大会に着目し、沖縄闘牛が地域経済にもたらす効果を分析する。

闘牛大会の関連支出については、主に 3 つの視点が考えられる。

一つ目は、闘牛大会に訪れる来場者がもたらす消費である(①来場者消費)。前述のとおり 3,000 人以上の来場者のある大きな大会から、500 人程度の小規模の大会も開催されており、来場者においては、会場に向かうまでの交通費や会場内の出店で飲食、関連グッズの購入などが発生していると考えられる。

二つ目は、大会の運営に係る関連支出である(②大会運営費)。大会の運営にあたっては、会場となる闘牛場の使用料や配布物の印刷費、広告費や会場等の警備費などが発生している。大会には入場料が設定され、そこから大会の運営費や参加した闘牛へのファイトマネーなどが配分される。入場料は、多くの大会で、男性 3,000 円(または 2,500 円)、女性 2,000 円、中高生 1,000 円と設定されている(全島大会については、運営費の高騰、出場牛飼育の負担増を理由に入場料改定が発表された(2026 年 11 月の秋の全島大会より、男性 4,000 円、女性 3,000 円、中高生据え置き)。

三つ目に、闘牛大会に参加する牛主の飼育費が考えられる(③牛主飼育費)。飼育費については、牛の餌代や牛舎の電気・ガス・水道代、闘牛を運ぶために荷台を架装したトラックなどが必要となる。現役の闘牛を購入して飼育することもあるが、子牛から育てる場合には、試合にデビューできる 4 歳頃までは飼育と訓練の期間となる。その後、10 歳頃から気力や体力的な衰えが見え始め牛主の判断で引退となるが、15 歳の現役牛もいるとされ、通常肉用牛と比べて長い期間、飼育費が発生することとなる。

本レポートではデータや情報の制約から、①来場者消費および②大会運営費の 2 つの視点から経済効果を分析することとしたい。③牛主飼育費については、牛主によって発生する金額に大小があり情報を得ることが難しいため今回の経済効果には含めないが、その規模感については次節で概観したい。

図表 4 闘牛大会の経済効果に係る 3 つの視点

①来場者消費



闘牛大会来場者の飲食費や交通費、グッズ購入費など

②大会運営費



闘牛大会の会場費や広告費、警備費やファイトマネーなど

③牛主飼育費



闘牛を飼育する牛主が支出する餌代や水道光熱費、牛舎維持費など

▼闘牛場での出店



※著者撮影

▼会場内で販売される大会ビデオ



※著者撮影

今回の試算は、2025 年 8 月から 2026 年 7 月までの 1 年間に開催された闘牛大会を対象とし、その開催に伴って発生した支出を経済効果として整理することとした。対象となる闘牛大会は計 26 件であり、累計の来場者数については、大会運営に携わる（一社）沖縄県闘牛組合連合会へのヒアリングをもとに 30,150 人と設定した。

（一財）沖縄観光コンベンションビューローが提供する「おきなわ観光地域カルテ」によれば、「石川多目的ドーム」への来訪者数は年間で 104,512 人となっている（掲載データの都合により、2025 年 7 月～2026 年 6 月で計算）。今回試算した闘牛大会の来場者数（30,150 人）の約 3 倍に相当するが、闘牛大会の日以外での利用や施設見学、闘牛の訓練、ドーム隣接の公園や飲食店の利用客なども含まれるとすれば、概ね妥当な水準と考えられる。また、県外発地の来訪者数は 22,539 人となっており、前年から 40.6%（6,452 人）増加している。うるま市内の観光施設の中でも特に、県外来訪者数の増加率が高いスポットとなっており、沖縄闘牛や関連コンテンツへの関心の高まりが背景にある可能性も考えられる。

図表 5 うるま市内における主な観光施設の県外発地来訪者数（単位：人）

施設	当年※	前年	前年比
海中道路	180,658	190,663	-5.2%
海の駅あやはし館	166,611	148,506	12.2%
果報バンタ	152,949	144,631	5.8%
うるマルシェ	93,884	98,277	-4.5%
あまわりパーク	87,333	96,770	-9.8%
勝連城址	20,186	25,888	-22.0%
石川多目的ドーム	22,359	15,907	40.6%

※出所：（一財）沖縄観光コンベンションビューロー「おきなわ観光地域カルテ」より作成

※2025 年 7 月～2026 年 6 月で計算

闘牛大会における①来場者消費については、飲食費や交通費、関連グッズの購入費などが想定されるが、本試算では、来場者に共通して発生する可能性が高い飲食費に限定して推計した。会場内の出店では、ジュースやビールなどのドリンク(200円～400円)、沖縄そばやタコライスなどの軽食(400円～700円)を楽しむことができる。今回は一定の条件の下、来場者の飲食費を簡易的に試算しその額を約2,110万円とした。なお、入場料についても、②大会運営費による需要増との重複を避けるため、来場者消費に含めていない。

大会運営費については、(一社)沖縄県闘牛組合連合会から大会運営に係るデータを提供いただいた。ただし、すべての大会の支出データを入手できないため、一部の大会の費用実績を参考にしつつ、大会規模等を考慮したうえで、他の大会においても一定程度の同様の運営費目が発生しているものと仮定し推計した。これにより大会運営費の総額を約7,770万円と推計した。

①来場者消費および②大会運営費を合わせた直接的な支出額は、合計で約9,880万円となる。

図表 6 経済効果の前提条件

効果の対象とする闘牛大会	26件(2025年8月～2026年7月の1年間)
総来場者数	約30,150人
① 来場者の消費支出	約2,110万円(飲食費のみ)
② 大会運営費支出	約7,770万円
① + ②	約9,880万円

(2)経済効果の分析結果

経済効果については、「2020年(令和2年)沖縄県産業連関表(35部門表)」を用いて、①来場者消費および②大会運営費を合わせた直接支出額から、県内での生産活動に結びつく直接効果額を求め、その直接効果額の発生に必要な原材料などを満たすために発生する1次間接効果、そして直接効果および1次間接効果によって生み出された雇用者所得が個人消費を通して関連する産業に波及する2次間接効果を分析する。これら効果を合計したものを闘牛大会の経済効果(経済波及効果)として示す。ただし、本試算は闘牛大会に伴って発生した支出を基に算出した経済波及効果であり、他の県内消費からの振替分等を除いた純粋な新規需要を示すものではないことに留意する必要がある。

以上の前提を基に試算した結果、闘牛大会の経済効果は1億3,489万円となった。①来場者消費および②大会運営費を合わせた直接支出額9,880万円から県外へ流出せずに県内産業に誘発される直接効果額は8,618万円となり、1次間接効果は1,378万円、2次間接効果は3,494万円となった。

図表 7: 経済効果分析結果(単位: 万円)

	経済効果 (生産誘発額)	粗付加価値 誘発額	雇用者所得 誘発額
直接効果	8,618	6,819	5,437
1次間接効果	1,378	787	368
2次間接効果	3,494	2,202	898
合計	13,489	9,808	6,703

(3) 考察

沖縄闘牛については、例年、同程度の規模や頻度で大会等を実施している。今後も、同程度の大会規模・開催頻度が維持されれば、毎年 1 億円以上の経済波及効果が発生することが期待される。また、石川多目的ドームへの県外来訪者数が増加していることや、地域の催しと合わせた取組が進んでいることなどを踏まえると、沖縄闘牛に対する関心は着実に広がっているものと考えられる。こうした動きが継続すれば、将来的にはさらなる来場者増加や経済効果の拡大につながる可能性がある。

なお、今回試算した経済効果については、沖縄闘牛を取り巻く効果のうち一定の範囲を取り扱った限定的な試算である。先で示したとおり、③牛主飼育費が含まれていないことはもちろん、①来場者消費についても、交通費やグッズ購入費などが含まれておらず、闘牛に関連するすべての需要を網羅したものでない。また、今回はすべての来場者が県内居住者という前提で試算しているが、全国闘牛サミットや観光闘牛の参加者など、闘牛を目的に沖縄に訪れた県外からの来場者については、その前後の宿泊費や交通費なども沖縄闘牛の経済効果の一部といっても差し支えないだろう。牛の売買や交流による闘牛関係者の県外との往来のほか、沖縄闘牛に関する書籍や写真集、映像作品や SNS 発信なども考えられ、その経済効果はさらに大きいものとなることが想定される。

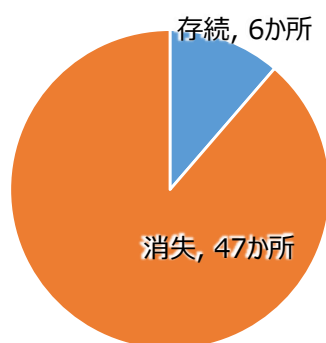
今回はデータの制約上、前提条件を簡易的に推計しているが、沖縄闘牛がもたらす需要増加を正確に捉えるためには、来場者へのアンケートや個々の大会予算の整理など、関連データをさらに精査することが有用である。

4. 次代への継承・発展に向けて

(1) 沖縄闘牛に迫る課題

沖縄闘牛は地域の魅力を高めるコンテンツであるとともに、地域に一定の経済効果をもたらしていることを示した。しかしながら、次代への継承や持続可能性という視点では、いくつか課題が指摘される。その一つが担い手不足による牛主及び闘牛数の減少である。前節で触れたとおり、闘牛を育てるには、牛の購入から牛舎の維持、毎日の餌の準備や訓練などが必要となり、1 トン前後の闘牛を強く育てていくためには、相応の費用や手間暇がかかる。かつて、北部から南部、そして離島にも闘牛場が存在していたが、県内で存続している闘牛場は 6 か所のみであり、それだけ県内各地で行われていた闘牛飼育が縮小していることがうかがえる。

図表 8 県内の闘牛場について

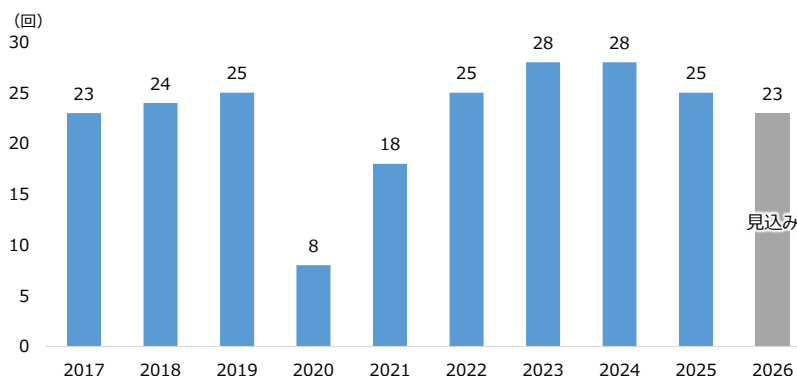


現在、利用されている闘牛場	
今帰仁村営今帰仁闘牛場	(今帰仁村)
本部町多目的広場闘牛場	(本部町)
うるま市営石川多目的ドーム	(うるま市)
安慶名闘牛場	(うるま市)
八重山闘牛場	(石垣市)
与那国闘牛場	(与那国町)

※出所: (一社)沖縄県闘牛組合連合会資料より作成

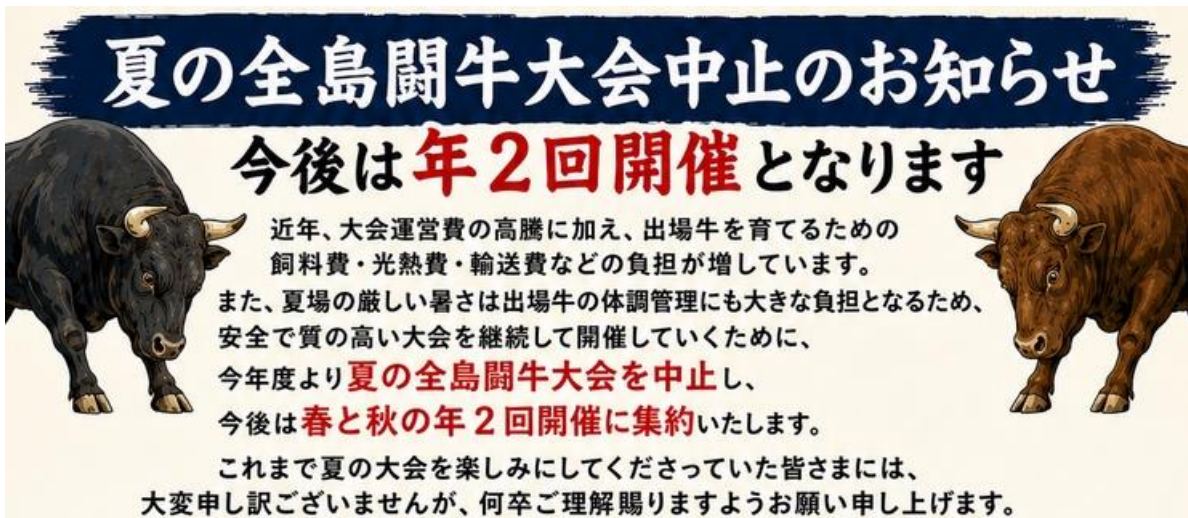
また、大会の開催回数も、ここ 1、2 年で減少傾向がみられる(図表参照)。現在、闘牛の数は試合に出場している牛でおよそ 250 頭、デビュー前の子牛なども含めると 400~500 頭と言われているが、牛の購入費や飼育費の高騰が担い手不足に拍車をかけており、闘牛数の減少が大会数の減少に影響を及ぼしているという。実際に 2026 年からは、大会運営費の高騰に加え、出場牛を育てるための飼料費、光熱費、輸送費などの負担が増していることを背景に、夏の全島大会が当面中止となっている。

図表 9 県内における闘牛大会開催数の推移



※出所: (一社)沖縄県闘牛組合連合会資料より作成

▼夏の全島闘牛大会中止のお知らせ



夏の全島闘牛大会中止のお知らせ

今後は年2回開催となります

近年、大会運営費の高騰に加え、出場牛を育てるための飼料費・光熱費・輸送費などの負担が増えています。

また、夏場の厳しい暑さは出場牛の体調管理にも大きな負担となるため、安全で質の高い大会を継続して開催していくために、今年度より**夏の全島闘牛大会を中止し、**今後は**春と秋の年2回開催に集約**いたします。

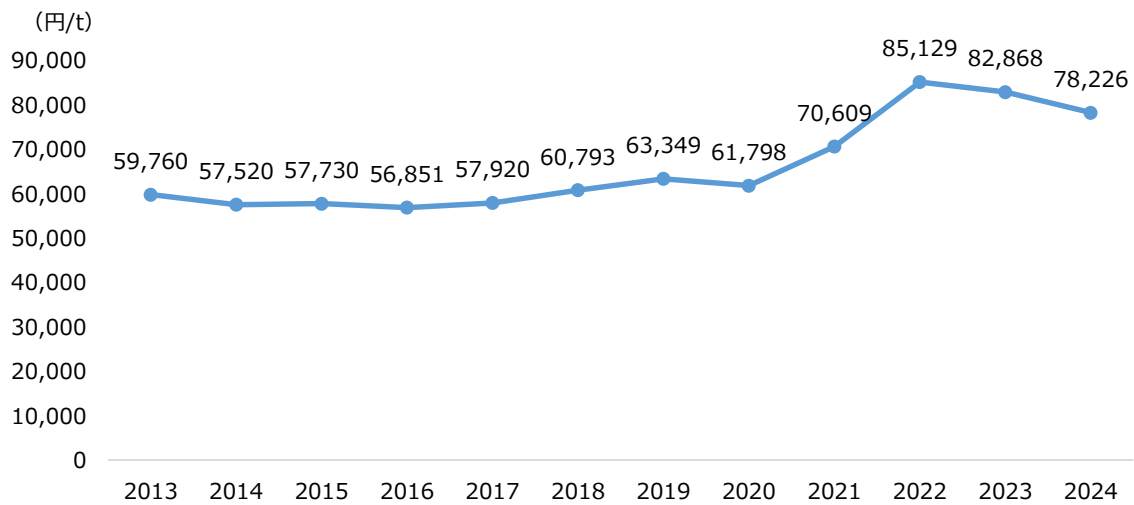
これまで夏の大会を楽しみにしてくださっていた皆さまには、大変申し訳ございませんが、何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

※出所: (一社) 沖縄県闘牛組合連合会

闘牛の飼育については、より強い闘牛に育てるべく、一般的な肉用牛よりも高い飼育コストと手間暇がかかるとされている。参考までに、肉用牛に与える配合飼料の流通価格をみると、2024年の1トンあたりの価格は78,226円となっている。2020年時点と比べて約1.3倍となっており、2020年以前まで横ばいであった価格がここ数年で急激に高騰していることがわかる。また、全国平均であるが、交雑種肥育牛の1頭当たりの年間飼料費は2024年で40.4万円、飼料価格と同様にここ数年で急激に高騰し、2020年比で1.4倍となっている。先に述べたとおり県内の闘牛数は400~500頭といわれるが、肉用牛の飼料費を単純な参考値として500頭に当てはめても年間約2億円にのぼる。数値の定義が異なるため単純比較はできないものの、これは先で試算した経済効果を超える数字である。

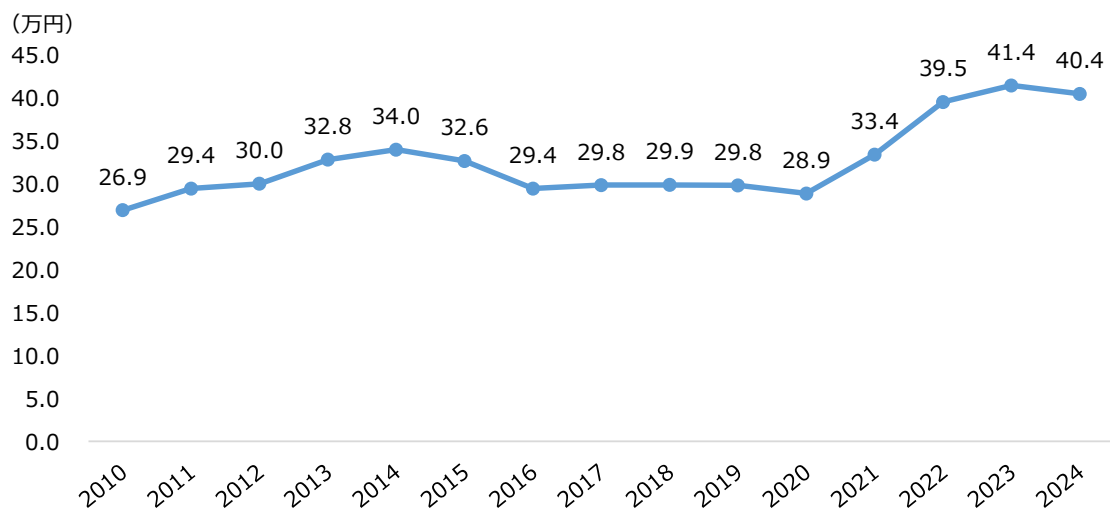
闘牛は一度の試合に出ると相応の休養期間が必要であり、年に何度も大会に出られるわけではない。得られるファイトマネーも限られることから、飼育にかかる多くのコストを踏まえると、長期的に闘牛で利益を得ることはほとんどないという。基本的にコストが上回るものであり、多くの牛主にとってはコストをかけてでも楽しみたい娯楽である。そのような牛主をはじめとする関係者の闘牛愛が、今日までの闘牛文化を支えてきたといえるが、近年の飼育費の高騰はその負担を増すものであり、闘牛飼育を諦めてしまうきっかけとなり得るとともに、新たに闘牛飼育を始めたいと考える新規参入の阻害要因となり得る懸念がある。

図表 10 肉用牛配合飼料流通価格の推移(県内主要銘柄、沖縄本島価格)



※出所:沖縄県農林水産部畜産課(2025.7)「おきなわの畜産」

図表 11 交雑種肥育牛生産費-飼料費(全国、1 頭当たり年間)



※出所:農林水産省(2026)「畜産物生産費統計」

(2)結び - 沖縄闘牛の次代への継承・発展に向けて

本レポートでは、沖縄闘牛を取り巻く新たな動きや地域に根差した様々な取り組みから、その評価やあり方の変化に触れ、それらが地域にもたらす効果や影響を分析した。

かつて県内全土で親しまれてきた沖縄闘牛が、時代の変化とともに縮小していきつつも、近年は、「闘牛のまち うるま市」を中心に、地元根付き地域文化を体感するイベントとしての性格も強めつつ、様々なメディア露出の機会も増え、認知や関心が高まるなど、新たな盛り上がりを見せている。さらに、うるま市を中心に沖縄闘牛が盛り上がることで、県内各地の闘牛組合の活気につながっている。このような取り組みは、沖縄闘牛を地域の魅力を高めるコンテンツとして昇華するとともに、地域に一定の経済効果をもたらしていることについて前章までに示した。

しかし一方では、担い手不足や飼育費の高騰といった次代への継承に向けた課題が挙げられた。闘牛飼育を行う牛主にとっては、コストや手間暇のかかる娯楽であり、そこに経済合理性という視点は強くない。牛主や闘牛関係者の闘牛愛が沖縄の闘牛文化を支えてきたといえるが、裏を返せばそれに依存しているともいえる。牛主が飼育負担を理由に飼育を辞めてしまえば、必然的に闘牛文化が消滅してしまう恐れがある。

担い手不足への対応や牛主の闘牛飼育に対するモチベーションの維持という視点では、闘牛関係者だけでなく、より積極的な地域の関わりが重要だと考える。単に、県民の関心が高まり、毎回の大会に多くの来場者が来るだけでも、牛主のモチベーションにつながるだろう。闘牛を知ってはいいても、実際に観覧したことがない県民の方が多い。例えば、一部の地域では行われているが、地域文化の教育・体験として教育機関のプログラムに盛り込むなど、多くの県民が一度は観覧する仕組みなどがあると良い。また、近年では、多くのスポーツ競技と同様、闘牛大会にスポンサー企業を集めるという案もあるという。もちろんスポンサーによってファイトマネーが増えることが直接的にモチベーションを高めることも考えられるが、金銭的な視点以外でも、スポンサー協賛によって交流人口や注目度が増え、勝ち負けの感動が高まること自体が、牛主にとってのモチベーションの向上へとつながるだろう。

伝統文化の多くは、経済合理性で測れないからこそその魅力や価値がある。最終的に公的な支援や保護によってその文化が継承されていくこともあるが、沖縄闘牛については、牛主や多くの関係者の努力や闘牛愛によって、現在まで継承されてきたと言えるだろう。魅力ある地域資源・文化資源として、県民や地域の企業、関係機関の関心が高まることによって、次代への継承、そしてかつてのように県内全土で闘牛文化が発展していくことに期待したい。

▼沖縄闘牛がつなぐ人と地域▼



※著者撮影



以上